

人になるということ

菅 支 那 子

人になるということ

この兩三年来、「人づくり」ということがしきりに問題にされ、その論議が紙上をにぎわしている。さまざまな人が、いろいろな立場からそれを論じているが、そのなかで、政府や多くの民間人がいう「人づくり」という言葉には、何となく人工的ニュアンスが感じられ、人間を手段と見做す傾向があるのは否定出来ない。社会や時代の要求に応じ、その必要にかなった人間をつくり出すというのが、実はこの問題の発想の仕方であった。しかしそのもとをただせば、人工衛星その他でおくれをとったアメリカが、その方面の技術人や学者を急激につくり出さねばならなくなって、科学技術者づくりをやり出したことが、わが国にも怒濤のようにおしよせて来たのではなかったろうか。数年前、英国に滞在した折も、既にその方向に教育を向け変えていることを知ったわけであった。

私は人間形成を、そのような人間づくりとは全く逆な、自ら進んで人になることだと解釈して、その過程をできる限り掘り下げて見よう。人間は誰でも、先づ個人として生れる。個人として生れた人間が、実は人になるのである。人間は自然的存在として生れ、個人としては

自然の中で、自然法則に従って生きる。これが人になると、自然を超え、いわば第二の性質を得るようになる。さまざまな自然的存在の中で、人間のみが自然を超える能力を持っているのも、人間には本来、そのような可能性が賦与されているからである。自然そのものは可能的に自己超越的であるが、この自己超越の可能性は人間の中で、人間を通して、始めて実現されるのである。

個人は本来の可能性を実現することができて人になるが、それは文化の世界で、人々がその構成メンバーである共同社会の一員となって、始めて可能なのである。共同社会の一員として、個人である人間はいろいろな役割を演ずることを学ぶ。ある役割は、人生上の諸段階のほりながら、連続的にそれを演ずるだろう。あるものを、交互に又は同時に演ずるであろう。およそ何かの役割を演ずるには、ある特殊な能力や力を用いることになるが、その場合、普通一般には天分の一部を用いるに過ぎない。ある個人にとって、一つの役割を演ずる方が、他の役割を演ずるより一層、適するのはいうまでもない。いづれにしろ何かの役割を演ずる時、人間は一定の範囲内で成長するわけである

社 福 会 社 ぬ。

が、それが他の役割を演ずるのに大切な成長を助けたり、妨げたりする。役割というものはその需要によって、また、才能を働かせたり、知性や感情の能力を発揮するための機会によって、大いに異なってくる。しかしながらその役割に対する需要がどのように大きかろうと、その機会がどのように多くあろうと、一つの役割だけでは、現在あるがままの人となる可能性やあるがままの人になった力の全部を、徹底的に使いつくしてしまうとは考えられない。人であるためには、一つの以上の役割を演じなければならず、多くの役割を兼務しなければならぬ。

人になる際、人間は同じ特殊の能力を持った同じ個人でいるわけである。しかしその生活の事情からして、他の可能性を犠牲にしても、特定の可能性を実現することが要求されるので、人としての成長が終ってしまうことはない。相変わらず同じ個人のままにいるが、その人格を断えず成長させ、達成するのである。しかもその人格は複雑であって、決して完全に固定するとか、統一されてしまうことはない。人格というものは、その成長過程のどの段階においても、ある方向に進んで発展するが、他の方向には何となく発展しにくい仕組みを持っている。

一人の間を、多少、けんか腰だとかいいなりになると考えたり、外向的だとか内向的だとか考えることはあっても、人格というものを、特長や性質の単なる複合体であるとか、特長や性質がさまざまに変わって行くその度合によるのだと見做してはならない。人格の特長は、他人に対する態度や他人とともに行動するその仕方に、あらわれるもの

である。人格は実に、複合体であるが、動的な複合体である。その根源は、人間があるがままの個人として生れながらに賦与されているところの、特殊な可能性にあるといえる。しかもその可能性をさまざまに実現することによって、個々の人格は成りたっているのである。幼少時代の生活環境とか、彼に対する他人の行動や態度が、彼の側に特殊な反応を呼び起し、他の反応をば押えつけ、禁ずるようになるのである。こうした幼少時に反応の仕方を選ぶように発育することが、即ちある態度はするが、他の態度をしないようにする傾向が、後年の人格成長に影響し、その特長になって行く。そして次第に文化的役割を演ずることを学び、職業に就き、いろいろな情況に出くわすにつれて、生来の感情、行動の能力を、更に成長させることの必要を痛感する。人は人になる時必ず経験するように、どの成長段階においても、さまざまな方向にもその事を選択することによって、形成されるのである。そしてどの段階をとり上げて見ても、以前とは別のものになっているし、今までは違った人格をかちえているということが出来る。

しかしながら人になる際に、人間の子供がこうむる変化は、ただ単に個人としての可能性をいろいろの仕方を実現することだ、と理解されるべきではない。一層、突っこんで、子供が文化的役割を演ずることを学ぶようになるその過程とその時に経験する内的成長を、追求しなければならぬ。人間社会を構成するそのメンバーたちは、個人として相互に関係しあっているだけではない。人によって構成される理想的共同社会と人々を結合させる社会構造の複雑な網の中で、人々が占める地位を通して、相互に関係しあうのである。同じことを逆説的

にこういうことも出来る。人間は人として始めて、相互に非個人的で一般的な関係を持つようになるし、そのような関係を持つことは、人になるのに欠くことの出来ぬ条件である。子供がこのような非個人的関係を持つようになるのも、他人と結合し、他人に依存するためであるともいうことができる。多くの習慣と伝統、人間の社会的遺産をつくり上げている既成の生活様式は、人類が自然の過程によって継承して来たものではない。それにもかかわらず、人間が生来持っている反応や情緒的応答によって、文化は一つの世代から他の世代へと伝えられるのである。

当然のことながら、人間は他人の情緒感情のあらわれに対し、非常に敏感である。彼に対して愛情がはっきり示されると、それに相応する愛情で答えるが、敵意が示されると、恐れてそれを避けるか、もしくはそれに呼応する怒りの感情を激発させるかする。このような相互呼応に加えて、等しく生来的で、もっと重要な、もう一つの型の反応が考えられる。これは他人の情緒的状态や感情態度に対す、反応とは別の、と一致する呼応とでも呼ぶべきものである。先づ他人の側では、感情上の心の乱れに対する一般の敏感さが認められる。即ち個人からもう一人の個人へと、一種の動揺が伝えられるのがわかる場合がある。それは丁度、群衆とか動物の群れに見出すようなものである。そのような伝染には、はっきりした識別力がともなうこともある。たとえば、他人の恐怖心が第三の人間、または事物に向けて感じられているとわかれば、その人自身もまたそれを恐れるようになり勝である。それ故、一つの対称が恐れられていようが望まれていようが、避けられていよ

うが求められていようが、その何れの場合にも、一人にとっての明らかに関心事は、もう一人にも同じような関心をひき起しがちである。

他人の感情に対するこのような敏感さは、他人から何かを学ぶのになくてはならぬものであるが、それとても知性なしには役立たない。

ひな鳥は他の鳥が示す恐怖に感情的に反応することによって、自然界の敵を恐れることを学ぶ。しかしおよそ学ぶということが起るためには、他の鳥の恐怖は何に向けられているかを、そのひな鳥ははっきりと識別しなければならぬ。子供の場合は、もっと高度の知性を学ばねばならぬ。仲間からは、文化的に承認された部類の事物や人間、習慣が打ち立てた一般的な生き方に一致するとか一致しない行動、などを識別することを学ばねばならぬ。そのような学習は概念をつくり、分析的に抽象する能力、いい換えれば合理性を与えられた人間が始めてなし得るのである。そして他人から学ぶ過程の中で、人間に生来具っている合理性は発展するのである。それにしても、合理性は単に知的であるだけでは十分でない。概念をつくり、抽象的普遍概念を用いて考える能力を、その中に包含せねばならぬが、それに限定されることはない。合理的人間とは、恐怖とか怒りとか感覚的欲望といった原始的感情とは別の次元の感情能力を持った人でもある。それは賞讃、軽べつ、憤慨等の人間感情の能力のことである。それはまた、肯定と否定、熱望と後悔の如き態度に対する人間の能力のことであって、概念的思想和相関する能力であると同様、はっきりした合理性にとっても、欠いてはならぬものである。このような能力のうちのどれかを成長させることは、他の能力を成長させることに依存しているのである。その

理由というのは、およそ感情が結びつく対象は、さまざまな部類に属していると考えられ、いろいろな特質によって特色づけられた対象だからである。理想的或は理想化された対象だからである。斯様にして、私どもは人をその勇気の故に、或は美しさの故に、賞讃する。またその臆病とか卑劣さの故に、軽べつする。そして一つの行動を有効だと認したり、その残忍さのために憤慨したりする。このような理想化された感じ方とか一人からもう一人へと感情を伝達する能力なしには、人間社会が存在することも、一世代から次の世代へと文化を伝達することも、あり得ない。孤独の中で生きる寂しい個人が、原始的感情を呼びさまされることはあるであろう。しかし人間の仲間と結びあうこと

福祉

とによって、始めて情緒や理想化された感じ方は呼びさまされるのである。このように感情を他人と分かちあうことは、およそその事を伝達するのに根本的な様式であるが、儀式、芸術、伝統などを、また言語そのものを、象徴的に伝えるのに必要な条件でもあるのである。換言すれば、言語によってもの事が適当に表現され、伝達されるのは、このような感情によって始めて可能なのである。他方、恐怖とか怒りは意味をなさない叫びとか間投詞などとともに、音声に出して表わされるのはいうまでもない。このような理想化された感じ方は、他人と実際に交ることを通して、子供の中に呼び起されるのは当然であるが、それとともにその感情は伝説や神話、英雄や聖者の物語に具象化されることによって、先祖の理想や規範は歴史を形成するところの、歴史の継承者に伝えられるのである。これというのも子供が人になる際入って行く共同社会は、歴史的共同社会であるとともに、理想化された

共同社会でもあるからである。自分についての過去の記憶が、その人が同一人であるという認識に必要だと屢々、指摘して来た。一個人が連続的に同一であるのは、如何な時にも存在するものが背後に残して来た過去から生じたという、その事実を帰因するのである。しかも人間の同一性は、現在を理想的に構成する要素として、過去が引き続き現存することによるのである。従って、現在の中で過去が理想的に生きていくのだと見做される記憶は、合理性——合道理性——に欠くことができない。人は理想的な、生きた過去をその中に含むところの現在に生きている。そして潜在的未來は、個人の時間的存在の制限を超えてひろがっているのである。

先輩が記憶している過去を物語にされた過去として伝え、自分が代ってそれにあづかる限りにおいて、個々の人間はその文化の歴史的去に参与することができる。彼の属する社会は、それ独自の文化と歴史を持った特定の社会である。特定の社会として、多少のひろがりを持ち、時間的に存在している。事実、その社会は限られた時間的存在として、歴史を持つのである。しかも人間社会が歴史的存在であるのは、それが時間的存在であるからだけではない。太陽系は限られた時間を通して存在するところの、特殊な組織体であるが、人間社会や特定の文化が歴史を持つという意味では、歴史を持っていない。人間社会の個々のメンバーが、記憶している過去をその後継者に伝え、万人共通の過去を代理して彼らと分かちあうことが、人間社会に単なる時間的存在と区別された、歴史的存在を与えるのである。一世代から他の世代へと伝えられ、物語化された過去は、事実上の過去を多少ともゆ

がめた説明になっていることは否めない。実際の過去はある程度、記録の中で発見される筈だし、人間の過去の業績の断片や破壊された遺物から、苦心して再建されねばならぬ。しかもそこで生きた言葉がとりかわされなければ、如何な歴史家も過去を発見するようにはならぬ。いだらうし、如何な人間歴史も発見されることにはならないであらう。こう考えて来ると、人というものは彼が記憶している過去と連続的であり、その過去によく通じているところの現在の中で生活し、かつ行動する存在である。更に彼がその中で生活し行動する現在はまだ、彼が他人とともにするものであり、他人と共通の過去によく通じている現在でもあるのである。人間を合理的存在として区別する感情や知性の可能性が、本来、与えられていなければ、人間はそのような現在に入りこむことはできないであらう。また、そのような現在を見出し、その中に入って行かなければ、人にはなれないであらう。逆のいい方をすると、合理的存在となるために、歴史的存在になることが必要であるが、歴史的存在としての人間は、その合理性を実現する際に克服しなければならぬ諸制限をまぬがれないのである。人が共通の歴史的過去として、他人と分かちあう過去は、特殊のしかも限られた過去である。個人が特定の共同社会のメンバーでなければならぬというその事實は、他の特定の共同社会のメンバーとなることを妨げる。しかもそれぞれの共同社会は文化的であり、文化的だから理想的でもあるので、文化に参加することは理想的だから普遍的であるものに、ひいては普遍的だから時間的制限を越えるものに、ある程度、参加することを意味するのである。

以上、人となるのに本質的と思われる、判然とした能力を実現するのに必要な諸条件につき、考察して来た。次に、人間の成長過程におけるどの段階も、その人自身から発する行動によって始まることを強調せねばならぬ。人になるためには、既に述べた通り、個人は伝統が打ち建てた一般的仕方で行動し、境遇や機会が要求する文化的役割を演ずることを学ばねばならぬ。しかしながら、子供はその文化によって「つくられる」と考えたり、その学習は他人が彼におよぼす力への反動だと見るのは、真理をゆがめる結果にならう。彼の演ずる役割は一般的であっても、個々の行動をなすことによって、彼に果された役割を演ずるのは、彼、個人である。二人の間は、それぞれ個人である故に、一つの役割を全く同じように演ずることはあり得ない。各人はその行動においてその人特有であって、同じ国語を話す人々が、その習慣に従う際に、その人特有の話し方をするようなものである。その上、人は多くの役割を演ずるが、それらの役割は文化の一般的標準に従って統合され、組織されねばならぬ。しかし個人自身が実際にその組織づくりをなし遂げねばならぬのである。別の文化の中で、或は同じ文化でも異なった条件の下で育てられると、その個人は幾分、別の人格に成長するであらう。そしてその人格は比べられぬ程に独自のであって、一個人として行動することによって、その人格を達成することも、等しく事実である。

既に指摘した通り、人になる時、個人は生来の可能性をいろいろに發揮する。個人がどのようにして成長するか、その可能性のうちのとれが、また、どの程度、実現されるかは、その文化の一般的事情とか、

彼の特定の生活環境によって変つて来る。人々がつくる共同社会のメンバーになることによって、始めて人となることが出来るが、すべての個人は人格を達成する際に、その根底から、本質から、変化成長するのである。即ち人は自分自身を客体として考えられるようにならねばならぬ。これは個人が消極的にこうむると同時に積極的に成し遂げるところの、内的変化だと考えることができる。そのような変化が達成されるのは、個人自らが活動して始めて可能になるのである。能動的な主体としての自我から客体としての自我へと個人が分化して、そのような内的変化は起るといえよう。人のみが自我たり得るのであり、自我とは客体と主体への成極化を意味するのである。マルティン・ブーバーの用語でいえば、汝と私との関係が成立することである。シカゴ大学教授であった故G・H・ミードは「心と自我と社会」と題する著書の中で、「一般化された他者」という面白い概念を導入して、自我内の変化を説明している。彼に従えば、自我全体は「I me」の両方から成っているのであって、「I」は行動を起すが、「me」はそれに応答する。「I」は「me」との相互作用によって、十分にその本性を發揮していく。しかもここでいう「me」においては、他者の態度が全部、組織され、自我の中に引き継がれているのであって、「me」の中で他者は一般化され、貯蔵される。斯く一般化された他者の態度は共同社会の態度でもあり、このような社会化の過程を通して、衝動的個人は合理的——合道理的——人間になるのだという意味のことを述べている。

合理性——合道理性——は周知の通り、自己意識を意味する。「汝自身を知れ」というソクラテスの命令、デカルトの「我コギト、カン

トのコペルニカスの転廻等々は、自己を知らずしては世界を知り得ないことを、はっきりと立証している。しかし認識する自我——知る人——として、人は自分を客体だと考えられるようにならねばならぬばかりではない。道徳的存在としての人間にも、それは等しく欠くことが出来ない。道徳的であるためには、行為が正邪という普遍的規範に一致すると、判断できるばかりでなく、自分自身に関しても道徳的判断を下して、理想的徳によって自己を評価できねばならない。また、道徳というものは、判断という認識的行為だけで成り立っているのではない。道徳的であるために、個人は自制しなければならぬ。認識の対象であると同様、行動の対象にもならなければならぬ。人は他人に対してのみならず、自分自身に対しても行動し、いろいろと心構えをするのである。自分自身の行動や業績に誇り或は恥を感じる。他人について肯定したり、否定したりして来たように、自分自身に関しても肯定したり否定したりする。自分を統制し、自分の行動を支配する。自分の意識的生活の中に、自我として、人としての自分自身についてのイメージと観念を持つのである。

人間のみが自分を客体として考える可能性を与えられているが、他方、他人と交際し、相互に作用しあうことなしには、既に述べた内的変化を達成することはできないであろう。客体だと見做された自我は他人にとっても客体であると同様、反省された自己のイメージでもある。先づ、他人にとって興味あり、関心ある客体として、自己を意識するようになる。既に見て来たように、自分に対して他人が示した感情に反応し、自分以外の事物に示される態度を、他人と分ちあう傾向

が見られる。しかしそのように他人の原始的感情に敏感であることが、実質において自己意識を生ずるのではない。子供は自分を意識しないで、自分に対して怒りが示されると、恐れてしりごみするか、或はお返しとしての怒りを感じる。また、第三の対象に対する他人の単純な感情を分ちあうことにも、自己意識は含まれていない。客体としての自分自身に向けられた、そのような感情態度を、他人と分ちあうことは実際、子供にはできない。自分に対して客体となることは、合理性の特長である感じ方が成長して行くのと、本質的に結びついている。

他人が彼自身に示す感情態度を他人と分ちあうことの中で、またそれを他人と分ちあうことによって、人は自分自身を客体と考えられるようになるのである。人が意識する自我は、他人が賞讃したり、非難したりする自我であり、他人が肯定したり、否定したりする自我である。自分に対するこのような感情を分ちあうことによって、個人は自分にとっての客体として、再び生れて来るのである。

しかしながら、個人が人になるその内的変化は、単なる自己再生ではない。それは、彼が現に属している共同社会を再建することを意味する。勿論、彼が個人としてその中に生れて来た共同社会が、人々からなる共同社会として、かねてから存在していたことは事実である。

そういうわけで、諸制度や言語等々を持った文化は、また、彼が継承するのを待ちつつ、既にそこに存在していたのである。しかし文化は人々の中で内面化されて始めて継承することが出来るので、文化継承の過程は文化再創造の過程だといわねばならぬ。個人が彼自身にとって客体だと考えられるようになるとその客体は、既に述べた通り、他

人にとっての客体として、自分を反省することである。若し他人に対して客体だということが既にならば、彼自身にとっても客体とはなり得ないであろう。とはいえ、彼自身を他人にとっての客体として認めることは、彼自身客体であるところの主体として、他人を認めることを意味していなければならない。人々からなる共同社会は、自我の共同社会、即ち仲間である主体の共同社会なのである。

人になる際、個人は生来持っている合理性を發揮する。ここでいう合理性は、単に知的であるにとどまらぬと、繰り返し強調しなければならぬ。人の合理性は彼の全存在に浸透する。これこそが人の本質的な在り方である。自分自身に対して客体となる時、人は単に知的に自分を意識するようになるばかりではないし、客体と主体の関係が認識論的であるばかりではない。それはまた、存在論的でもある。自分の自我を知ることとはある点で、他人の自我を知ることとは異なっているが、なお、自我を知ることと他人の自我を知ることが、相互に依存しあうことを強調したい。しかし知識は事物に関してのみ可能だとすれば、主体としての自我に関する知識はあり得ないという議論に、何と答えるべきであろうか。私どもが知り得るものは経験的で、現象的な自我に過ぎぬとするカントの超越的理想主義の立場を信ずると公言しないまでも、主体と客体、知る人と知られるものとの区別は、すべての知る働きに欠くことのできぬものである。しかしながら、自我についての知識は、特別な意味で、不完全であり、不十分である。人になる際、個人は一種の変化、存在そのものが変化するのを経験する。そのような変化の中で、人は自分を客体として意識するようになる。子

供が自分の中の変化を通して始めて自己意識に到達し得るように、経験によって彼自身についての知識は広まり、深まって行くが、それは同時に彼自身の中の変化であり、彼自身が変化することである。どのような事物についても、その完全な知識を持ち得るとは考えられない。それにもかかわらず、自然物と人間の両方に関する知識が増大するにつれて、知る人としての自分自身の中に、ある変化が起こるのはたしかである。しかし自然物とか他人そのものが、知られる過程の中で変わるとは考えられない。他方、自分の自我を一層よく知るようになることは自分の知識を増すことばかりでなくして、自分自身の中に変化を齎すことである。自分自身についての観念は、現在あるがままのその人にとって欠くことのできぬものである。従ってその観念内の変化は、同時に彼の中の変化を意味するのである。

しかし人になるのに、自分についての観念が重要であるばかりではない。他人を自我として認めることも等しく重要なのである。自己の意識が他人に対する客体として自己を認めることによって起るように、もう一つの自我の意識は他人を単に客体としてのみでなく、主体として認めることによっても起るのである。他人との関係が認識的であり、他人を知ることがいわれ得る限り、他人は主体としての彼にとって、認識的客体となるのである。しかし主体であるところの客体として、他人を知る点で、他人は他の客体とは異なっている。ここで大切なのは、他人を自我として認識することは、また、仲間・主体である限りにおいて可能だということである。仲間・主体としての他人は、元來、認識の対象ではなくして、感情や観念とともに分ちあう存在、

共通の世界の中でも暮す存在、そして感情や観念を伝達する存在なのである。このような関係の心理的根源と原型は、既に指摘した通り、他人に対して相互反応をすると同様、他人もともに感情反応をする傾向に見出されるわけである。勿論、感情に感染し易いだけでは、人々を十分、仲間・主体にすることはできない。同情的想像とでも呼ぶべきものによって、代理として他人の感情や態度を理解し、その中にはいりこんで行く限りにおいて、共通の世界で生きる仲間・主体となるのである。真に分ちあえる感情は実は、原始的感情ではなくて、合理的存在のみに許され、理想化されたものみに結びつく、高い種類の感情である。共通の世界に生きる仲間・主体の間で、始めて言語による伝達は可能であり、そのような象徴的伝達を展開することによって、人々は完全な意味で仲間・主体となるのである。仲間・主体としての人と人との関係は、あらゆる言語が提供する人称代名詞間にある区別に、現われている。人々は個々の人間として、互いに語りかける。しかし私が話しかけるあなたは人である。そのあなたは人として個人であるが、同時に思想的で普遍的他我なのである。

人になることは、自然にその端を発し、自然的存在としての人間が持つ可能性に、その根源を持つている。しかもその可能性を実現するに当って、そこには何か新しいものへの推移、自然の超克ともいうべきものがある。その中で、人間個人はもとより、自然界そのものも変化するのである。人として人間が生きている世界、即ち理想化された文化の世界とともに自然にその根源を持っており、自然と自然界の生成過程によって、制約されている。しかも文化が起る時、それは新しい理

想的な世界で始まるばかりでなく、既往にさかのぼって、その永続的な変化の根源を、文化の中にうみ出すのである。事実、人間が人らしくなる時、文化の世界を不断に再創造する個々の人の活動によって、自然は変えられるのである。比喩的にいうと、人間が人になる時、自分にとっての客体となるように変えられてしまうように、自然は文化をつくり出す時、同じ様に自然にとっての対象になるのである。このようにいってしまふと、一方では、自然を思う存分、比喩的に人間化してしまふことになるが、他方、自分自身にとっての客体であることは、単に認識の対象となるばかりでなく、自我が指揮する行為の対象にもなるという、大切な真理を表わす役目もしているのである。自分自身にとっての客体である人は、自分を統制し、自分の活動を支配するところの、新しくかつ特色ある行動をするようになる。勿論、主体と客体とに自己を区別することは、二つの自我になるという意味ではない。一個人としての同一性が、その過程の中で、失われてしまうものでもない。彼が今、働きかけ、意識する自我は外的な事物ではないし、それ自身情性的で受動的なものでもない。その活動を支配し得る限りにおいて、人は自己を支配することが出来るし、その諸活動は彼のものである。しかも彼の支配行動は、彼が支配する諸活動と同じではない。人として、自己を意識し、自己を支配するが、その自己意識も自己支配も、完全でないし、絶対的でもない。子供の成長とともに経験が広まるにつれ、彼が意識する自我は拡大され、一層はつきりして来る。行動ばかりでなく、態度や感情を意識するようにもなる。今まで無意識だった自分の過去の行動の動機を見出し、認めることを後で学ぶに

つれて、自分が飢えているとか怒っていると感じていることを知るのである。自分自身を意識し、理解する度が増すにつれて、更に広い範囲で、自己支配ができるようになるのである。しかも客体としての自我の拡大は、主体としての自我を犠牲にして起るのではない。若し客体としての自我の拡大が支配されることを一層、容易にするとすれば、主体としての自我による能動的支配力も、相呼応して増大するといわねばならぬ。

自分自身を客体として統制、支配して行く際、人は新しい、特色ある行動をしているのである。そのような行動が現われて来ると、一個人はもう一人の人へ、そして環境は理想化された世界へと変化する。というのは、支配され統制される自我は個人の自我であるが、他方、自我が理想化されて来て始めて、統制する主体ともなるのである。そこで支配される諸活動は個々の行動であるが、文化的伝統によって樹立され、普遍的な言葉によって理想化された活動として、統制され、支配されるのである。

子供が注意をひこうとして示す自己意識とか大人が関心を持つている観衆の対象になったと感じる時のきまり悪さに示される自己意識と理想化された客体としての自我意識と呼ばれるものの中には、重要な区別がなされねばならぬ。他人のせんさくの対象として自我を意識するようになることは、事実、自己統制とは非常にかけ離れて来るので、行動者を阻止したら、無力にしてしまう結果になりかねない。他方、肉体的支配と呼ばれるものと自我の意識的統制との間にも、等しく重要な区別がある。歩き始めた子供、或は飛び始めた小鳥は、肉体的に

支配力を得つつある。寧ろその肉体的動作は調整されつつあるともいえる。しかし歩く際、子供は自己意識をあらわして来ない。まして飛ぶ時の小鳥は決して自己意識的にはならない。そのような肉体的支配が自己統制をあらわすこともない。筋肉調整を得ることよき対照になるのは、文化的に樹立された行動の仕方を学ぶことである。文化的役割を演ずることは自我意識を覚まさせる結果になり、同時に自我を意識的に支配する機会にもなる。同じことは、文化的役割を立派に演ずるには、手先の熟練を得ておくことが必要な場合にもいい得る。

丁度、警官が正確に射撃することを学んで置かねばならぬと同様である。公衆を守るのをその本務とする警官は、自己意識的にその行動を支配・統制する限りにおいて、始めて本務を完うすることができるのである。警官として行動するために、警官として自分を意識せねばならない。即ち警官として行動する時、その視線が向けられる多角的自我の姿を意識せねばならない。すべての人がこのような公的地位にくくわけではないし、このように形式化された役割を演ずるわけではない。しかしあらゆる個人は人になる時、多くの職務につき、多くの役割を演ずる。そしてその一つ一つを、自己意識的に演じなければならぬ。これはその役割を演ずる自分について、イメージ或は観念を持たねばならぬことを意味する。そしてある特定の姿勢でとられた写真のように、それはその人の一面だけを示している。人はいろいろと異なった姿勢や様子で写真にとられ、それぞれにおいて同一人と認められるように、人は自分自身を警官であり、父であり、市民等々であるところの、同一人として意識するのである。

斯様に人は誰でも、自分自身の存在に欠くことが出来ぬものとして、自分のイメージと観念を、自分の中に包蔵しているのである。彼はなりたいと願う人間として、かつまた、自分が斯くあるべきだと信ずる姿の人間として、自分についての理想をつくり、それを心にいだいているのである。自分についてのこのような観念はある程度、常に理想化されている。人としての彼の行動は自己意識的であり、自己支配的であり、自己統制的である。しかし自分についての観念と理想がなければ、そのように支配することも、支配したいと願うこともできないであろう。これと同じことはゴルファー、芸術家、実業家、夫、或は主婦についても等しくいえることである。ゴルファーは普通、一流の選手になろうなどは願わないであろう。自分の能力について現実的な観念を持っていれば、そのような野望はいだかない。自分は不器用だと自認している。しかしゴルフをし続けるならば、その演技が上達させられるし、競技者としてのつつましかない理想も達成されよう。と期待して、実はゴルフをするのである。若者はいつか有名になれると夢想するかもしれないが、経験や円熟さが増し、その能力がのびされ、新しい目的がはっきりして来ると、青年の夢はもっと落ち着いて、定着した願望にとって代るのである。事実、現代のように競争の激しい社会においても、誰もが野望をいだくというわけではない。しかし人は自分自身の素質や能力に対する評価と確信に、多少ともつり合った理想を持つものである。この理想が自己統制を可能にするばかりでなく、彼の生活に秩序を与え、その人格がまとまり統合されるのに基礎を提供するのである。

自我の観念は他人にとっての客体として、自我を表わす一方、それは誇張されるか縮小されるか、或は他人が見た、ゆがめられた自我のイメージであるかである。一人の人の自我観念は主として愛慕する両親とか敬服する友人が見たままの彼のイメージを表わしたものであるか、彼らの非難、軽べつ、無関心を反省したところの、彼のイメージを表わしているかである。しかし自己観念は単なる、そうした反映であるばかりでなく、自分自身の経験によって変更され、修正されるものである。気質と呼ぶべきものの影響をうけることもある。兎に角どのような要因が働こうと、一人の人はその能力を過大に見積るだろうし、もう一人は過少に評価するだろう。一人の人は他人によって認められず、その業績からして理由のない優越感を持つだろう。他方、もう一人は他人によって等しく認められず、理由のない劣等感をいだくであろう。誰でも時に、自分が英雄か聖者であつたらと願うことがある。しかし極く少数の人しかその何れかに本気でなろうとしないし、それを自分の人格的理想として受け入れようとしな。寧ろ、それは彼らに応しいものでないし、彼らがそうあるべきだと認めるものではないと感ずる。人が人生において出遭うところの二者択一の道は、一般的で抽象的可能性でなくて、彼に親しく身近な可能性である。全く不可能と思われるものを、人は選びはしない。たとえそれが示す目的には達しにくいと感ずるも、もっと望ましいと思われるものの方を選ぶだろう。他人に可能なことも、彼には不可能と感ずるだろうし、他人に望ましいと彼が認めるものも、自分には望ましくないと認め、望ましくないと感ずることもある。

自分自身についての人間の理解は、決して完全でない。偶然の事情の中で、予期しない出来事に直面して、驚いたり喜んだりしながら、或はたまげたりあきれたりしながら、行動し、感ずるのである。自身自身についての観念は無意識的動機や欲求によってゆがめられ、いびつにされる。しかも自我理想は彼がそのような観念を認めることを好まないばかりか、それが認められないようにする。事実、無意識的動機や欲求は意識の次元にまで高められるであろう。しかしそうなるには、動機や欲求は自我の観念に同化され、それ自身が変り、そうすることによって、自我の観念は拡大され、再建される必要がある。個人が人として成長する間中、その人格が変化する時にも、自己の同一性を保持し続けなければならない。そのためには、記憶の連続がなければならない。過去を過去として記憶しなければならぬ。そうすれば、忘れてしまったことを過去の事柄として、思い出すことができる。自己についての観念は、どの段階においても、その過去と未来の両方を含んでいる筈である。現在は断えず過去になるし、新しい現在には新しい可能性のある未来をもたらず故に、自己についての観念を再検討し、改造することによって始めて、それを保持できるのである。そのような自己観念の修正は、それに呼応する自己理想の修正をとまなうのはいふ迄もない。寧ろ現在あるがままの自己についての観念は、自我理想と一致しなければ、変り得ないといふべきであろう。人として生きるためには、自分の自我とともに暮さねばならぬ。そして人がともに暮し続けることのできるその自我は、ある程度の誇りと自尊心を感ずることのできるような自我である。人にとって、自信を持ちたいとの

要求は根深く、避けられぬものである。その自我理想がおかされようとする折には、それをまもらざるを得ない。その際、他人や自分自身に対して得意になって、自己理想をまもうとするだろう。或は自分の行動や意図を説明したり、十分な理由を示したりして、そうするだろう。自分自身の自信をとりもどすために、他人に懇願して、自信を得ようとするのである。時たまあるように、自信がおかされようとして、失われてしまったと感ずれば、公衆の面前で告白するか、自己卑下をしても、自信をとりもどそうと努めるであろう。自分が無価値であると、深くいつまでも感じ、堪えられぬ程に罪を自覚して、多くの先人たちは神に救いを求めざるを得なかつた。しかし救いを見出したと確信するには、自分は罪の重荷から解放された、神に受け入れられたとの内的確証を得なければならぬ。斯くして自分の自我理想を、救われた魂の理想としてとりもどし、神の恵みを保証されていると感じることによって、内的自信の必要をみたしたのである。

他人の承認が自我理想の基盤であり、それによって自我理想は養われているとはいえ、自信が彼には絶対的に必要なのでそれをみたすため、各人はその理想を自分のものとして内面化して行かねばならぬ。人はすべての人によって承認されねばならぬとは感じない。聖者または狂人は、その自信のための栄養材を、彼の信ずる神或は理想化された他者によって承認されたいと感ずるだろう。民衆の指導者は大衆の喝采に、自信の支えを見出すことだろう。自信というものは、実存するかまたは理想化された他者から、何らかの支持を得たいと願うわけである。しかし他方、他人の承認、不承認から独立して考えることも、

それに対して無関心であることもあるのである。一般に、人が追求し、見出そうとする自信は、彼の同僚や上司たちによって承認された時に得られるものである。それに反して、彼が目下だと見做す人々や完全に局外者だと感ずる人々の態度、意見に対しては無関心であるか、軽べつのである。常習犯罪者は、善良な市民によって、社会的に道徳的に非難されるが、そのような道徳的非難に対しては無とん着である。

ところが、仲間の代表者に逮捕されたり、処罰されたりすることを大いに恐れている。市民は彼にとつての敵と考えられ、従つて当然のえじきと見做されるので、ためらわずに利用もするし、殺しもする。所謂、社会の立派な一員以上に、彼がやましいところがあると感ずるとか、自責の念を持つと考えるのは適当でない。他のすべての人と同様に、彼自身の自我理想を持っているし、自分が自信を持っていることに満足している。すりであらうと、大ものゆすりであらうと、自分の手腕と他人におよぼす影響力に当然の誇りを感じるのである。各人の自我理想は他人と共通にあづかるものであるが、また各人が自ら課した一種の規範を持っている。各人には、自分の品位にかかわると感じられるような行動や態度があるものである。しかも身を落して、それらの行為や態度をする限りについて、他人の前で恥かしいと思ひ、自分の目からしてもとがめられていると感ずるのである。

すべての人は自我理想の保証を絶対的に必要とするが、その自我理想は各人の人格によって、それぞれ異なっている。それによって生き、それと一致して自分自身を正当化したり非難したりするところのその規範は、様々に異なった規範である。とはいえ、それは文化的共同社

会の共通の規範をいろいろと説明したものに外ならない。その理想や規範は小集団の中で、文化により、人により、どんなに異なっていようと、それらの主張と擁護は実にかかって、普遍的な人らしい徳を所有することにあり得る。自分自身のもので理想や規範を心に描き、それを受け入れるには、ある程度の叡知が必要である。自分の理想を堅持し、自分の規範に従って生きるには、堅忍即ち勇気が必要である。人がその自我を正当化したり、非難するには、正義への訴えを認めるべきである。そして自己を統制するには、節度を現わし、克己力を持っていなければならぬのである。